



バッハの森通信

第 160 号
2023 年
7 月 20 日発行

一般財団法人バッハの森

〒300-2635 茨城県つくば市東光台2-7-9

<http://www.bach.or.jp>

☎ 029-847-8696 / Fax 029-847-8699

e-mail: info@bach.or.jp

郵便振替 00380-4-16119 一般財団法人バッハの森

天より射す喜びの光

天の王国への招待に応えよう

2023 年 6 月 25 日にバッハの森記念奏楽堂では、前半、イエス・キリストの「昇天」、後半、「聖霊降臨」という二つのテーマで「バッハの森コンサート」が開かれました。ここにそこで朗読された「メディタツイオ」を修正してご紹介します。

* * *

新約聖書は、ナザレのイエスがエルサレム神殿の大祭司たちによって逮捕され、ローマ人の知事ピラトの裁判で死刑の判決を受け、刑場ゴルゴタで十字架に架けられて処刑され、その遺体が墓に葬られたという「受難物語」と、その三日後にイエスは復活し、その 40 日後に天に昇り、50 日後に弟子たちに聖霊が降臨したということを、一連の出来事として報告します。「受難物語」がそれなりに理解できる出来事の報告であるのに対して、「復活」「昇天」「聖霊降臨」となると、常識では理解しがたい不思議な話の連続と言わざるをえません。しかしながら、それらを単に神秘的な物語と断定するのは早計です。なぜなら「復活」「昇天」「聖霊降臨」によって始まったイエスの弟子たちの宣教活動から、キリスト教が誕生した歴史は否定することができない歴史的事実だからです。「復活」「昇天」「聖霊降臨」が何を語っているのか理解するためには、そこに組み込まれている象徴的な意味を解明する必要があります。

まず新約聖書を理解するための大前提を理解しておかなければなりません。イエスの死後、彼の教えと行動について語り伝え、これらの伝承を「新約聖書」にまとめた人々は、ナザレのイエスはヘブライ語でメ

シア、ギリシャ語でキリストであると信じ、そのことを「聖書」、すなわち「旧約聖書」が証明していると信じていました。「復活」「昇天」「聖霊降臨」は、古代イスラエル・ユダヤの伝承を継承し、ナザレのイエスをメシアと信じる人々だけが経験した出来事だったのです。

復活したイエスと出会う

福音書は、生前イエスは、自分の受難と復活を何度も弟子たちに予告したが、弟子たちはその意味を理解しなかったと伝えます。「受難物語」は、弟子の一人ユダが裏切ってイエスの逮捕を手引きしたことや、高弟ペテロがイエスの弟子であることを否認したことなど、最後まで弟子たちがイエスを理解していなかったことを伝えます。ところが、彼の遺体を墓に葬った三日後から、イエスはしばしば弟子たちに現れ、聖書によって彼の受難の意味を伝えては姿を消したと語ります。こうしてイエスの死の意味を、聖書が伝える「過越の小羊」「苦難の僕(シメバ)」などに重ねて理解した弟子たちは、この経験を「復活したイエスと出会った」と表現しました。「過越の小羊」と「苦難の僕(シメバ)」については後ほど説明します。いずれにしてもイエスの復活は、単に死人が息を吹き返したという意味ではありません。弟子たちが、彼らに現れたイエスに教えられ、彼の教えと行動の意味をようやく理解したということなのです。

天から来たイエス・キリスト

「復活したイエスと出会った」経験を通して弟子たちが気付いた重大な「事実」がありました。イエス・キリストは「天」から来た方だという「事実」です。当然、この「事実」は、物理的な意味ではありません。

例えば、イエスは「主の祈り」で「天におられる私たちの父よ、あなたの王国が来ますように。あなたのお考えが実現しますように、天におけるように、地上においても」と祈ることを教えました。この祈りが示しているように、地上が天の王国になることをイエス

が本気で願い、そのために命がけで教え、行動していたことを、ようやく悟った弟子たちは、イエスが天から地上に来た方であることを「事実」として受け止めたのです。

ヨハネによる福音書 14 章は、過越祭の晩餐、いわゆる「最後の晩餐」で、イエスが弟子たちに語った別れの言葉を伝えます。ここでイエスは言います。「私を愛す者、彼は私の言葉を守るであろう。そして私の父は彼を愛すであろう。私たちは彼のところに来て、彼のところを住まいにするであろう。お前たちが聞いているのは私の言葉ではなく、私を送った父の言葉だ」。このように、イエスの行動も語る言葉も、そのまま天の父の行動や言葉と全く一つであると語られています。イエスを逮捕した大祭司たちは、このような言葉によってイエスは神を冒瀆したといきり立ち、彼を死刑にすることを決めました。しかし、天の王国を地上に実現する願いをひたむきに追い求めたイエスにとって、天の父と全く同じ思いを語るのは当然のことでした。ですから弟子たちに「天の父が完全な方であるように、お前たちも完全な者になれ」と教えたのです。

「過越の小羊」「苦難の僕(シハバ)」

聖書のあちこちに、ナザレのイエスがメシアであることの証明を見つけ出した弟子たちが、特に感銘を受けた箇所は、奴隷にされていた先祖がエジプトを脱出したときに、「死」が過ぎ越す印(シズ)になるため犠牲になった「過越の小羊」と、紀元前 6 世紀に起きたバビロン捕囚の末期に、イザヤ書 40 章～55 章に預言詩を残した第二イザヤが描いた「苦難の僕(シハバ)」でした。先ず「過越の小羊」の伝承に基づき、十字架に架けられて犠牲になったイエスは「世の罪を取り除く神の小羊」であったと理解され、ラテン語典礼の「アニュス・デイ」(神の小羊)として伝えられました。

預言詩「苦難の僕(シハバ)」を要約すると、醜い容姿で病身、みんなから嫌われ軽蔑されている人を見て、皆、彼は神罰を受けたに違いないと思っていたが、実は彼の病氣も苦しみも、本来、罪を犯した者たちが受けるべき罰なのに、彼が代わって罰を受けてくれたのだ。彼が受けた苦しみによって、罪を犯した者たちは癒やされ平安に過ごすことができた、という代理贖罪論です。

このようなメシアの姿を描いた第二イザヤは、紀元前 586 年にエルサレムが占領されて神殿は瓦礫と化し、ダビデ王朝が滅亡して、有力者たちがバビロンに捕囚されてから 50 年近く経った頃、解放される希望を持って捕囚民を元気づけた預言者です。バビロン捕囚と

いう民族滅亡の危機は、先祖が契約を結んだ主(ヅ)なる神を裏切ったために受けた神罰だから、皆で一斉に赦しを乞い願おうと、人々の間に広がっていた反省に対して、確かに私たちは罪を犯したが、それは自分の力で贖罪できるほど軽い罪ではない。先ず神の無限の憐れみにすがって、自分たちに代わって贖罪してくれるメシアが与えられるよう願うべきだという思いから、「苦難の僕」が生まれたと思われます。その 500 年後にイエスの弟子たちは、十字架で処刑されたイエスこそ「苦難の僕」に他ならないと悟ったのです。十字架に架けられて世の罪を一身に背負ったイエスの贖罪によって、私たちには平安が与えられたという信仰です。

主は王となられた

バビロン捕囚が終わる直前に、捕囚からの解放を予知して、第二イザヤは告げました。

何と美しいことか／山々の上で良い知らせを伝える者の足は。／平和を告げ、幸せを知らせ、救いを聞かせる者、／「あなたの神、主は王となられた」と／シオンに告げる者の足は。／主がシオンに帰られるとき／歓声を上げ、喜び歌え／エルサレムの廃墟よ。／主はその民を慰め、エルサレムを贖い、地の果ても神の救いを見るから。

この預言詩は歴史的状況を反映しています。紀元前 538 年にペルシャ王キュロスがバビロンに無血入城、新バビロニアが滅亡し、すべての捕囚民は解放されました。約 50 年前にエルサレムから捕囚されていた人々とその子孫たちも解放されて故郷に帰り、その 25 年後には廃墟になっていたシオンの丘に神殿を建立しました。この神殿はソロモンが紀元前 10 世紀に建てたエルサレム神殿に対して、第二神殿と呼ばれます。第二イザヤは、第二神殿の建設を先取りして、「王となられた」主なる神がシオンに帰って来られる様子を預言したのです。

古代世界において、王は国々の最高支配者の称号でしたが、第二イザヤが「主は王となられた」と言うとき、この世の国々の王ではなく、天の王国の王を意味していました。ですから、主がシオンに帰られるとき「地の果ても神の救いを見る」と語ったのです。「詩篇」の中に「主は王となられた」と告げる詩篇が相当数あります。今日のコンサートで朗読したり、合唱した詩篇でも「主は全地に君臨する偉大なる王」「異邦人の上の王」などと語られています。このような、イスラエルの主なる神が全世界の王であるという信仰は、バビロン捕囚とそれに続く時代にユダヤ人の間で

展開された「終末論的メシアニズム」と呼ばれています。それは、アッシリア、バビロニア、ペルシャと次々と代わる支配者たちの覇権が、一時はいかにも強力であっても、結局、儚く終わってしまう有様を目の当たりにして、武力による支配ではなく、世界を公平に裁き、正義と公正によって平和を永遠に確立する天の王を、世界中の人々が歓声を上げて喜び称える終わりの日を待望しようという信念でした。

「終末論的メシアニズム」を継承したキリスト教徒は、紀元1世紀末に、ローマ帝国の激しい迫害により多数の殉教者を出しながら、この世の終末に再臨するキリストを心から待望していました。彼らが著作した「ヨハネの黙示録」の中で、天上の主なる神が、ほふられた小羊（天上のイエス・キリスト）と共に、地上の王たちを墮落させた大淫婦バビロン（ローマ帝国）を裁いて滅ぼし、永遠の支配を確立したことを語った後、全員で主を讃美します。

ハレルヤ。／全能者である神、主が王となられた。
／私たちは喜び、大いに喜び／神の栄光を称えよう
ではないか。／小羊（キリスト）の婚礼の日が来て、
花嫁（殉教者）は支度を整えた。

天より射す喜びの光

天から地上に來たイエス・キリストが、受難によって世の罪を贖い、復活して死に勝利し、40日間にわたって弟子たちに現れて彼の教えと行動の意味を悟らせ、更に聖霊を天から送ると約束して、弟子たちが地上で生きるために準備を整えてから天に昇り、主なる神、天の王の右に座られた後、復活から50日目に聖霊降臨を迎えます。

エルサレムを離れず、約束されたものを待て、というイエスの言葉を守って、弟子たちが一緒に集まっていると、激しい風が吹いてくるような音が天から起こり、炎のような舌が分れ分かれに現れて一人一人の上にとどまると、彼ら、ガリラヤの人々は聖霊に満たされて、それぞれ諸国の言葉で話し出した、と使徒言行録2章が伝えます。この劇的な聖霊降臨の報告は、民族宗教ユダヤ教が国際的宗教キリスト教に発展した状況を象徴的に示しています。しかし、イエスの弟子たちの国際的宣教が、イエスの復活の50日後では早過ぎます。異邦人の使徒を自認したパウロの伝道活動が紀元50年頃、70年にユダヤ人の大反乱を鎮圧してエルサレムを占領したローマ人が、キリスト教徒も含めユダヤ人のエルサレム・ユダヤ地方立ち入りを禁止したことなどの歴史的展開の中で、キリスト教が国際的宗教として発展したことが分かっています。いずれ

にしても、1世紀末までに後に新約聖書に纏められる諸文書は、当時の国際語ギリシャ語で伝えられていました。

ここで、最初に、新約聖書を理解するための前提として、イエスの死後、ナザレのイエスはメシアであると信じ、そのことを「聖書」が証明していると信じた人々が新約聖書の諸文書を語り伝えたと、お話ししたことを思い出してください。この大前提に重大な追加をします。それは、バビロン捕囚の末期に「イスラエルの神、主は世界の諸民族の王になられた」と第二イザヤが語った頃から発展した「終末論的メシアニズム」の信仰です。

この信仰は、言い換えると、ナザレのイエスが目指した、天の王国を地上に建国することです。天の思い、天の生き方とは、強い者勝ち、自分がよければいいという自己中心的な地上の生き方の否定に他なりません。例えばイエスが教えた「敵を愛せ」という生き方です。当然、誰もそれでは生き残れないと考えて争い続けてきました。ところが、全世界で強い者勝ちを続けてきた結果、地球が壊れてきました。温暖化による世界的な天候異変です。このまま温暖化が進めば、誰も地球上に生き残れなくなることは今や自明です。このように地球の終末が近いことが分かっているにもかかわらず、誰も強い者勝ちを止めません。どうしたらいいのでしょうか。

次は聖霊降臨のカンタータの終結コラールです。

御神より喜びの光が私に射して来ます、
あなたがその愛らしい眼差しで
私を優しく見詰めてくださるときに。
おお、主イエスよ、私の愛(いと)しい宝よ、
あなたの御言葉、御霊(みたま)、御からだと血は
私を内側から元気づけてくださいます。
あなたの御腕に私を優しく受け入れてください、
御恵により私は温められるでしょう。
あなたの御言葉に招かれて私はまいります。

譬えによって、このコラールを説明しましょう。アルプスを登山中にクレヴァスに落ち、自力では這い上がれず、暗闇で凍えながら助けを呼んでいる人がいます。すると天の王はまず光を送って照らし、次に食料や水を与えて元気づけてくださる。そこで彼は願います。抱きしめて温めてくだされば、私は生き返るでしょう。天の王国へのお招きを信じます。

地球上で生き残る道を探し求めている私たちに、天の父を信頼し、聖霊の助けを待つよう示唆しているのではないのでしょうか。(石田友雄)

バッハの音楽の奥深さを楽しむ

解説と演奏による豊かな時間

去る6月9日に第6回「朝のオルガン音楽鑑賞会」が開かれました。この鑑賞会は、シーズンを通して隔週金曜日の午前中に開かれる「オルガン音楽研究会」のまとめです。研究会では、教会歴に沿ったコラールとそのオルガン編曲、それにカンタータを学びます。先ず友雄先生から教会歴、コラールの歌詞、関連する聖書の箇所などについて解説があり、友雄先生の訳詞によるコラールを、宮本先生のオルガン伴奏で斉唱します。その後で宮本先生から、そのコラールのオルガン編曲について説明があり、演奏されます。

今回は聖霊降臨がテーマなので、友雄先生から、聖霊を意味するギリシャ語「パラクレートス」が、聖霊の役割や働きによって「慰め主」「弁護者」「助け主」などに翻訳されることと、使徒言行録2章が伝える聖霊降臨について説明を受けました。宮本先生からは、ファンタジア「来たれ、聖霊、主なる神よ」Fantasia super “Komm, Heiliger Geist, Herre Gott” (BWV 651)、別形「来たれ、聖霊、主なる神よ」alio modo “Komm, Heiliger Geist, Herre Gott” (BWV 652)、「来たれ、創造主、聖霊よ」“Komm, Gott Schöpfer, Heiliger Geist” (BWV 667) の3曲のオルガン編曲について説明がありましたが、特に別形について、コード部で同じ音形がペダルに5回、手鍵盤に2回、計7回繰り返されているのは、聖霊がイエスの復活から7週かけて50日目に天から降りて来るのを表現しているのではないかという説明は興味深くうかがいました。

当日の友雄先生の解説からは、主に次の二つのことを学びました。コラール「来たれ、創造主、聖霊よ」で聖霊が創造主と呼ばれているのは、創世記1章の天地創造物語で、深淵の面を動く神の霊が、続いて起こる天地創造を暗示しており、神の霊／聖霊／創造神という神の働きを表している、ということでした。

次に使徒言行録2章が伝える聖霊降臨の物語は、聖霊を受けた弟子たちが突然、諸国の言葉で宣教を始めたという奇蹟について語るが、当然、キリスト教が、民族宗教ユダヤ教に止まらず国際的宗教に発

展したことを象徴的に語っている。同時に、この物語が旧約聖書の「バベルの塔」の物語の真意を伝え、それを発展させていることを理解しなければならない。「バベル」がヘブライ語「バラル」（混乱させる）から派生したという聖書の説明は、天に届く塔を建てて、天の神に代わって世界を自分たちの力で支配しようとする人間の野心を、天の神が、力によって統一されていた言語を混乱させて塔を建てられなくしたため、人々は四散したことを表している。要するに、力による支配は脆いものであることを示している。それに反して、イエスの弟子たちが聖霊降臨を受けて諸国の言葉で福音の宣教を始めたという物語は、世界の人々がそれぞれの言葉を話しながら、愛の教えで一つになったことを語っているのだという解説でした。友雄先生の解説で、旧約聖書と新約聖書の関係が、まるで宝石箱を開けるかのように明らかにされる面白さを味わいました。

宮本先生はバッハの壮大で深淵な音楽を、アーレントオルガンの素晴らしい音色で奏楽堂一杯に響かせて聴かせてくださいました。バッハの音楽は、聖書との関連、教会歴における意味などを、知れば知るほど限界のない奥深さが分かってきます。友雄先生の解説、宮本先生のオルガン演奏を聴きながら、この鑑賞会に集まった方々と豊かな時間を分かち合うことができていることに感慨を覚えると共にこれから更に理解を深めていくことができるよう願っております。

なお、私は『福音讃美歌集』（Evangelisches Gesangbuch）を参考に教会歴に沿って、各期節を象徴する色を学びながら、フラワー・アレンジメントによって出来る限り奏楽堂を飾らせていただこうと思っております。今回は、聖霊降臨のテーマに合わせて赤い百合を中心に花を生けました。

（松村治美）

* * *

バッハの森ワールドに入る

新しい喜びと感動に揺さぶられ

6月25日の「バッハの森コンサート」に参加しました。今回はハンドベル・クワイアのメンバーの一人として、コラールを演奏するという大役を担当

したので、大変緊張しました。

いつものように、ハンドベルの点鐘で始まり、オルガンが、J.S. バッハ「いと高きところにいます御神にのみ栄光あれ」を演奏、詩篇 47 篇の朗読、パレストリーナのミサ・ブレヴィスより「キリエ」「グロリア」の合唱と続けました。「キリエ」の清らかな歌声を聴いたとたんに緊張で堅くなっていた心と雑念が消え、「バッハの森ワールド」に入っていくことができました。

「メディタツィオ」では、コンサートの前半が「キリストの昇天」、後半が「聖霊降臨」という二つのテーマで構成されていることが説明され、エジプト脱出やバビロン捕囚にまで遡る歴史を背景に、特に「過越の小羊」と「苦難のしもべ」の姿に、イエスの弟子たちが、キリストの受難の意味を発見したことが解説されました。この解説を大変興味深く学んだ後で、オルガンと合唱で演奏されたコラール「主の眼差し受け／喜びの光／天より来たる」には本当に喜びの光が射してくるよう感じました。

更にその後でミサ・ブレヴィスより「アニヌス・デイ（神の小羊）」が歌われましたが、その最後の言葉「ドナ・ノービス・パチェム（私たちに平和を与えてください）」は深く心に届きました。コンサートを締めくくる「いかに美しく輝くことか、あかつきの星は」のオルガンの響きに思いを巡らし、再びハンドベルの点鐘で「バッハの森ワールド」は静かに幕を閉じました。

参加するたびに思うのですが、「バッハの森コンサート」では、オルガンとハンドベルと合唱の響き、その意味を伝える言葉に心が揺さぶられます。そして、毎回、新しい喜びと感動があります。

（横田博子）

「いかに美しく光り輝くか」



「来たれ、聖霊」

“Kom heiliger Geist, Herre Gott”

「来たれ、聖霊(ミタ)の主」

マルティン・ルター博士による改訂
『バプスト聖歌集』1545 年



来たれ、聖霊(ミタ)の主、
恵みの賜物(タモ)、我らに
満たして、愛燃やしたまえ。
御光、輝き、世界の民より
御民(ミタ)集めたる主を誉め
皆歌え、ハレルヤ、ハレルヤ。

2022 年度・統計

会員数 (2023. 3. 31)	入退会者数 増減 (昨年比)
維持会員 72 人	－1
賛助会員 34 人	＋1
学生会員 7 人	－2
計 113 人	計 －2

集会回数

参加者延べ人数 (2022. 4. 1～2023. 3. 31)

学習コース	回数	延べ人数
クワイア (混声合唱)	36	396
器楽アンサンブル	11	44
声楽アンサンブル	5	26
ハンドベル・クワイア	12	47
ハンドベル・リンガーズ	11	111
オルガン音楽研究会	11	86
クラヴィコード・オルガン教室	5	11
チェンバロ教室	1	2
声楽教室	3	7
オルガン・クラブ	13	37
聖書	32	238
オルガン・クラヴィコード・ チェンバロ練習	164	232
小計	301	1,237

公開プログラム

コラール・カンタータ入門	15	130
オルガン音楽鑑賞会	3	67
体験プログラム	1	4
楽器紹介ミニツアー	1	20
教会音楽セミナー	1	20
コンサート (大人向け)	2	72
コンサート (家族向け)	2	111
小計	25	424

運営活動

運営委員会	8	49
理事会・評議員会	2	17
クリスマス飾り付けと片付け	3	9
草取り、外周剪定	6	10
CD 制作関連相談会	1	2
打ち合わせ	8	23
小計	28	110

その他

祝会	1	19
音楽会準備会	2	19
外部コンサート (後援)	1	55
外部コンサート	1	*
小計	5	93

総計 359 回 1,864 人

会計報告 (2022. 4. 1～2023. 3. 31)

【経常損益】 単位：千円

収入の部	
基本財産受取利息	0
特定財産受取利息	0
年会費 (維持・賛助・学生会費)	717
事業収益	
1) 研究会 (学習コース)	1,416
2) 公開講座	184
3) コンサート	145
4) ワークショップ	0
5) 音楽教室	51
6) 楽器使用料	169
7) 賃料収益 (家賃収入)	1,243
一般寄付金	2,511
雑収益 (管理棟家賃、施設利用料ほか)	796
計	7,232

支出の部	
給与手当	738
支払報酬 (会計事務所)	168
旅費交通費	225
通信運搬費 (郵送料、電話、ネット関係)	234
什器備品費 (楽譜・書籍)	61
消耗品費 (コピー用紙、文具他)	77
修繕費 (楽器メンテ、植栽、修繕)	3,305
印刷製本費 (バッハの森通信、チラシ)	43
光熱水料費	718
賃借費 (地代、機器リース料)	1,166
火災保険料	130
諸謝金	640
租税公課 (固定資産税、法人事業税)	369
負担金 (振込手数料)	4
雑費 (コピー使用料ほか)	80
計	7,958
当期経常増減額	－726

【指定寄付収支】 単位：千円

土地地上権積立		
(収入)		(支出)
前期繰越	1,298	
寄付	30	次期繰越 1,328
計	1,328	1,328

*今後の支出計画 2024 年 地上権 (奏楽堂) 880
 2024 年 地上権 (貸家敷地) 704
 2026 年 地上権 (聖書の国) 1,100

建物維持・修理

(収入)		(支出)	
前期繰越	876	建物塗装	451
寄付	533	シロアリ、貸家	537
		駐車場樹木	74
		エアコンクリーニング	84
		建物塗装一部	180
		次期繰越	83
計		1,409	1,409

* 今後の支出計画 2023 年 未定

オルガン修復

(収入)		(支出)	
前期繰越	694		
寄付	56	次期繰越	750
計		750	750

* 今後の支出計画 2023 年 未定

2022 年度の事業・会計報告

2022 年度の事業と会計の報告として、変化のあった点などをご報告いたします。

プログラムの変更

金曜日午後に行われていた「コラル研究会」を土曜日の「コラル・カンタータ研究」に統合し、「コラル・カンタータ研究」は隔週プログラムに変更されました。

例年 3 月に行われている「創立記念コンサート」を「春の教会音楽セミナー」として開催しました。

新規事業

講師の指導によるパイプオルガン体験として、新たに「パイプオルガン体験プログラム」を加え、1 組 3 名が体験レッスンを受けました。

施設利用

会員による施設利用として、5 月にナカルリコーダー教室が練習とコンサートを、10 月に鴨川華子氏と鈴木美紀子氏がバッハの森の後援で「バロック音楽の花束 Vol.1」のコンサートを行いました。

駐車場の造成

かねてより懸案であったバッハの森の駐車場として管理棟敷地に駐車場を造成しました。バッハの森建設当初はほぼ田んぼと空き地であった周辺の土地も、この数年で住宅が建ち並び、余剰のスペースを確保できなくなったため、バッハの「森」の一部を整備し駐車場としました。

なお、駐車場造成にかかった費用約 220 万円は、石田理事長の寄付によってまかなわれました。

(バッハの森会計担当)

理事会・評議員会

バッハの森は、一般財団法人として、毎年 3 月に理事会を、6 月に理事会、評議員会を開いています。3 月は事業計画と予算の作成、6 月は事業報告と決算の承認を行います。

今年は 6 月 24 日に、理事 3 名（欠席 1 名）、評議員 3 名（欠席 1 名）、監事 2 名の出席のもとに開催されました。

2022 年度の事業報告と決算報告がなされ、続いて 2024 年 1 月と 3 月及び 2026 年 4 月に予定されている地上権更新についての説明がなされました。

また、バッハの森が現在抱えている問題について討議が行われ、バッハの森の活性化についての提案がありました。

* 事業報告、会計報告については、左記の統計資料をご覧ください。
(戸部慶子)

運営委員会

2022 年 4 月 9 日(土) 参加者：9 名 (R2 名)
主な議題：新駐車場完成。広報チーム活動開始。

5 月 14 日(土) 参加者：7 名 (R1 名)
主な議題：聖書の国資料館入り口の白蟻駆除工事。

6 月 4 日(土) 参加者：7 名 (R1 名)
主な議題：「バロック音楽の花束」をバッハの森後援。

7 月 2 日(土) 参加者：6 名 (R1 名)
主な議題：「一子先生と奏でたクリスマス」の CD 化を検討。

9 月 10 日(土) 参加者：6 名 (R1 名)
主な議題：7 月に到着したクラヴィコードを紹介するコンサートの計画。

10 月 15 日(土) 参加者：5 名 (R1 名)
主な議題：クラヴィコードとリードオルガンの会？

11 月 19 日(土) 参加者：5 名 (R1 名)
主な議題：3 月に毎年開いていた創立記念コンサートの代わりに教会音楽セミナーを開く。

12 月 21 日(土) 参加者：4 名
主な議題：武澤秀平氏、宮下宣子氏が、来年 4 月、5 月に開く予定のコンサート、発表会について。

2023 年 1 月 14 日(土) 参加者：5 名 (R1 名)
主な議題：Taylor & Boody Organ Builders から、問い合わせがあったアーレント・オルガンの調整、今年は延期すると返答。

2 月 25 日(土) 参加者：5 名
主な議題：4 月 1 日に初級のハンドベル体験会を開く。
(塚越多恵子)

*R：オンライン参加

4. 1 **運営委員会** 参加者 5 名 (R 1)。
ハンドベル体験教室 15 名 (参加者 10 名、見学 1 名、講師 4 名)
4. 2 **発表会** オブレヒト音楽院 (武澤秀平氏主催)
4. 12 **コンサート** ユヴェナリス X 古澤巖
4. 23 **コンサート** バロック音楽の花束 (Vol. 2)
5. 5 **コラボセミナー** 古楽金管と合唱 (宮下宣子氏主催)
5. 13 **運営委員会** 参加者 5 名 (R 1)。
5. 24 **会計決算** TOMA 会計事務所 (大庭良子氏)、2 名。
6. 8 **オルガン調整** 河内克彦氏、アシスタント 1 名。
6. 9 **朝のオルガン音楽鑑賞会** 18 名。
6. 12 **漏水点検** フジエ 1 名。
6. 20 **相談** バロック音楽の花束 (10 月 10 日) 3 名。
6. 23 **漏水点検** 東部設備工業 3 名。
6. 24 **一般財団法人バッハの森理事会・評議員会** 9 名。
6. 25 **バッハの森コンサート**
26 名 (出演者 15 名、参加者 11 名)
6. 27～9. 14 **夏期休館**

歴史書・聖書入門 4. 8/6 名 (R 2)、4. 15/4 名、4. 22/7 名 (R 2)、5. 6/7 名 (R 1)、5. 13/5 名 (R 1)、5. 20/7 名 (R 2)、5. 27/5 名 (R 1)、6. 3/5 名 (R 2)、6. 10/6 名 (R 1)、6. 17/8 名 (R 1)。

ハンドベル・クワイア 4. 22/4 名、5. 27/4 名、5. 21/4 名、6. 10/4 名。

ハンドベル・リンガーズ 4. 16/14 名、6. 4/11 名、6. 18/12 名。

オルガン、クラヴィコード、チェンバロ練習

4. 5/1 名、4. 6/1 名、4. 7/2 名、4. 14/2 名、4. 19/1 名、4. 20/1 名、4. 21/1 名、4. 27/1 名、4. 28/2 名、5. 2/1 名、5. 6/1 名、5. 10/1 名、5. 12/3 名、5. 17/1 名、5. 18/1 名、5. 19/3 名、5. 20/1 名、5. 24/1 名、5. 25/1 名、5. 26/1 名、5. 31/1 名、6. 1/1 名、6. 2/3 名、6. 3/1 名、6. 7/1 名、6. 9/2 名、6. 14/1 名、6. 15/2 名、6. 16/4 名、6. 17/1 名、6. 20/1 名、6. 22/1 名、6. 24/2 名、6. 25/1 名、6. 28/1 名、6. 30/1 名。

J. S. バッハの音楽鑑賞シリーズ

コラール・カンタータ入門

カンタータ：「私を愛す者、彼は私の言葉を守るであろう」(BWV 59)

「響き渡れ、お前たち歌よ」(BWV 172)

コラール：「来たれ、聖霊(ミタ)の主」

「いかに麗しく光り輝くか」

4. 15 **オルガン**：参加者 4 名。
5. 6 **オルガン**：笠間きよ子。参加者 10 名。
5. 20 **オルガン**：金谷尚美。参加者 6 名。
6. 3 **オルガン**：金谷尚美。参加者 6 名。
6. 17 **オルガン**：安西文子、参加者 9 名。

学習コース

バッハの森クワイア 4. 8/5 名、4. 15/8 名、4. 22/11 名、5. 6/9 名、5. 13/7 名、5. 20/10 名、5. 27/11 名、6. 3/11 名、6. 10/11 名、6. 17/11 名、6. 24/13 名 (ゲネプロ)、6. 25/15 名 (コンサート)。

オルガン音楽研究会 4. 7/5 名、4. 21/6 名、5. 12/4 名、5. 26/5 名。

オルガン・クラブ 4. 14/2 名、4. 28/2 名、6. 2/2 名、6. 16/4 名。

寄付者芳名 (2023. 4. 1～6. 30)

一般寄付

下記の方々から計 410,150 円のご寄付をいただきました。

別所香苗、石田友雄、中村東子、賀来達三、岩渕倫子、比留間恵。

地上権積立寄付

下記の方々から計 380,000 円のご寄付をいただきました。

内藤節子、村上晴美、田中秀明、鴨川華子、賀来達三、佐藤隆、白川知預子、三宅利子、森脇左知代、本多美雄、並木聡子、南千津子、小嶋しのぶ、本多谷雄・和子、熊谷徹、笠間きよ子、宮本とも子、斉藤妙子、植田摩耶、松岡智子・広樹、吉原美智子、田崎瑞博、徐淑子。

建物積立寄付

下記の方々から計 18,000 円のご寄付をいただきました。

三縄肇・啓子、岩澤晴子。